新村出博士略年譜

柊源一編

明治九年十月四日　山口市に生る。山口県令関口隆吉次男

明治十三年　山口県師範学校附属小学校入学

明治十四年　父元老院議官となり東京向島小梅に移る。日本橋区本町藤木学校に移る。

明治十七年　佐原の栗本義喬塾に入る。在塾三年

明治二十年　静岡県尋常中学校入学

明治二十二年　徳川慶喜家扶（元小姓頭）新村猛雄に養子入籍（静岡市紺屋町）

明治二十五年三月　静岡県尋常中学校卒業。五月上京塩谷青山塾に入る。

同　九月　第一高等中学校予科一年入学

明治二十七年九月　同校本科一部一年

明治二十九年七月　同校卒業

明治二十九年九月　東京帝国大学文科大学博言学科入学。教授上田万年、教師フロレンツ。

明治三十年九月　本年以後パウル「言語史原理」を上田教授につき学ぶ。父主家に従ひ上京、駒込曙町十五に居住。

明治三十二年七月十日　東京帝国大学文科大学博言学科卒業。優等卒業生として銀時計を受く。

同　九月　東京帝国大学大学院入学。国語学専攻。指導教授上田万年。

明治三十三年五月十八日　上田、高楠、フロレンツ、藤岡、保科及び八杉と共に言語学会発会式。言語学雑誌は本年二月創刊、八杉と編輯に当る。（富山房刊）

同　七月二十三日　飛騨白川地方の方言調査のため八杉貞利と共に出張

同　十月十八日　任東京帝国大学文科大学助手

同　十一月十日　荒川重平長女豊子と結婚

明治三十四年三月　伊豆西海岸北部、七月西遠駿参尾地方方言採集

同　十月三日　東京帝国大学文科大学講師嘱託。文法学概論を講ず。

明治三十五年二月七日　任東京高等師範学校教授。スキートの「言語の歴史」講読

同　四月　文部省国語調査委員補助委員

明治三十六年九月十九日　東京外国語学校講師嘱託

明治三十七年　本年初めより抄物につき足利時代の国語研究。三、四月河内高貴寺慈雲遺稿、東寺観智院金剛蔵悉曇書調査

明治三十七年七月十日　東京帝国大学大学院退学

同　八月二十四日　兼任東京帝国大学文科大学助教授

同　十月二十五日　命国語学国文学第一講座分担

明治三十八年四月　足利学校抄物調査（上田教授に随行）

明治三十九年十一月十五日　言語学研究のため満二年間英仏独へ留

学を命ぜらる。京大に赴き狩野文科大学長、桑木、谷本教授等に会ひ、又榊氏と相見る。時雨の頃なり。

明治四十年一月二十五日　任京都帝国大学文科大学助教授

同　三月二日　横浜発。四月十日ジェノヴァ着、十一日ミュンヒェン着、十七日ベルリン着、ベルリン大学聴講生となる。Finck, W. Schultze, Grube に学ぶ。

明治四十一年四月十六日　ベルリン発萊府着、同十七日南行、墺、伊、瑞の旅に上り五月萊府着。ワイマール、エルフルト、マインツ、フランクフルト、ハイデルベルク、ストラスブルク、ラインを下りコブレンツ、バーナウ、ゲッチンゲンに遊び帰来。マールブルヒ夏期講習会出席

同　八月　ドレスデン万国エスペラント大会に出席

同　九月三日　ベルリン発アムステルダム、ライデン、デン・ハーグ及びアントウェルペン、ブリュッセル、ワーテルローを経て九日ロンドン着。ブリティッシュ・ミュージアムに学修

同　十一月十八日　オックスフォード大学に遊学一ケ月余、二十三日より連日ボドレア文庫の吉利支丹文献閲読抄録

同　十二月十二日　ロンドンに帰りブリティッシュ・ミュージアムの南蛮文献採訪。天草版イソポ謄写継続

明治四十二年二月　ロンドン発パリ転学。パリ大学聴講。パリ国立図書館訪問

同　三月下旬　パリ発ベルリンを経て露都着

同　四月十五日　ウラジオストック発、敦賀を経、帰宅

同　五月十七日　任京都帝国大学文科大学教授。言語学講座担任を命ず。

同　九月　京都市上京区河原町通丸太町上る西入る下の切通しに住す。

明治四十三年六月二十九日　授文学博士（推薦）

明治四十四年十月一日　補京都帝国大学附属図書館長

大正四年五月　図書館大会（九州各地）熊本、佐賀、唐津に出席。佐世保を経て七月帰宅

大正六年六月　鹿児島に赴き武藤長蔵の東道、四日苗代川一泊。五日午前中まで朝鮮住民旧跡遺文献調査、帰鹿。七日長崎に入り、八、九、十、十一日滞在。十二日山口に立寄る。

大正八年四月一日　官制改正につき辞令を用ひず京都帝国大学文学部勤務となる。

大正八年四月　土手町鴨川西畔、木戸侯旧邸に移住

同　九月十四日　支那へ出張仰付らる、京城泊、奉天泊、北京滞留十三日、十月三日津浦線にて南京、上海（蘇、杭）、十月十五日、上海発、十八日神戸着。那波利貞同伴。十月十九日帰学

大正十年四月　浜田耕作と共に大阪府三島郡千提寺村東藤次郎宅に至り吉利支丹遺物を調査

同　四月二十八日　欧米各国へ出張を命ず。五月一日京都発、六日横浜発香取丸。シアトル十九日着。シカゴ、ニューヨーク、プリンストン、ワシントン、ボストン、ニューヘヴン諸大学図書館博物館

同　六月　渡英。オックスフォード大学に吉利支丹文献渉猟撮影。九月、仏、白、蘭を経て十月ベルリンに入り、パリ

を経てマルセイユ発。十二月八日神戸帰着帰学

大正十一年　長崎再遊

大正十二年　京都市上京区小山中清町十九定住

同　四月　浜田と共に水戸徳川侯小梅邸を訪ひ、吉利支丹遺文遺物を精査す。

大正十三年四月一日　備中倉敷大原氏経営の図書館事業視察

大正十五年八月　駿、甲、相、東遊一ケ月

同　十月　仙台狩野文庫を見る。

昭和二年七月十四日より二十四日　長崎、島原、南国巡礼

昭和三年一月三十日　帝国学士院会員仰付らる。

昭和四年四月　水戸彰考館、足利学校訪書

同　五月　宇陀室生に泊。香落渓、大野

同　八月　再び高野に上る。二泊（南山訪書紀行）

昭和五年六月二日　叙従三位

昭和六年五月　吉沢義則と共に近畿方言学会を起す。

同　七月　木曽、松本、諏訪、甲州、入京。房州

昭和七年三月十六日　欧州各国へ出張を命ず。同日出発七月二十六日帰学

昭和八年一月十九日　宮中御講書始の儀、国書控仰付らる。（和名抄序文）

昭和九年一月　日本放送協会用語調査委員

同　二月三日　臨時ローマ字調査会委員仰付らる。

同　五月　日本学術振興会第十七委員会（古典翻訳）委員＝万葉英訳原案委員（十二月主査）

同　十二月二十二日　国語審議会委員仰付らる。「和名類聚抄」。

昭和十年一月二十八日　宮中御講書始の儀、国書進講を仰付らる

昭和十一年七月七日　叙勲一等授瑞宝章

同　十月十九日　依願免本官

同　十一月十七日　叙正三位

同　十二月二十八日　京都帝国大学名誉教授の名称を授く。

昭和十二年十月　音声学協会々長

昭和十三年　日本言語学会々長

昭和十五年六月　静岡高等学校出講（文化史）

同　十一月八日　国宝保存会委員仰付らる。

昭和十七年八月　日本民族学協会々長

昭和十八年二月　陽明文庫理事

同　三月　東洋文庫商議員

同　十月　独逸文化研究所理事

昭和十九年四月十一日　学術会議会員仰付らる。

昭和二十一年　東方文化研究所理事

昭和二十四年四月　日西文化協会名誉会長

昭和二十五年六月十一日　日本ダンテ学会々長

昭和二十六年八月　日西文化協会々長

同　十二月　日伊協会副会長

昭和三十一年十一月三日　文化勲章を授けらる。京都市名誉市民

昭和四十二年八月十七日　死去　銀杯一組を賜はる。

編者附記　主として故新村出先生の自撰年譜により、なるべく先生の文調をのこして本稿を草し、また令息新村猛教授の御校閲を経た。大分の御叱正を得て完成を期したい。

編輯部記　柊源一氏が病気入院されたため、新村出博士著述目録は本輯に間に合わなくなったが、追って掲載の予定であるから御諒承をお願いする。